

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名  
川島健

川島健氏の博士論文『ベケット・ポリティクス：サミュエル・ベケットと1930年代アイルランド・ナショナリズム』はアイルランド生まれの劇作家、小説家、詩人、批評家であった Samuel Beckett の作品像に対して新しい視点を与える試みである。生まれ故郷を捨て、一生の大半を外国で暮らし、英語だけでなく、母語でないフランス語でも執筆活動を続けた「コスモポリタンな作家」というイメージを捉え直して、アイルランドのナショナリズムとの関連を再確認することが川島氏の学術的貢献であるといえよう。

本論文は五章からなっている。第一章「ナショナリズムの政治学：『結婚』と『性愛』のレトリック」では、イギリス植民地主義と文化的独立を目指していたいわゆる「文芸復興」運動の作家たちの関係が焦点となっており、特に、「婚姻」、「家庭」、「経済」といったキーワードを中心に、イエイツ、シングなどの作家たちはどのように当時の現状を見、どのようにアイルランド文学の未来を考えていたかを分析している。この活動が生み出した様々な文学的イメージは、ベケットの作家としての出発点の背景ともなる。

第二章は「ダブリン地政学：オケイシー、ジョイス、ベケットあるいは卑猥な身体としての都市空間」である。アイルランドの精神的ルーツとされていた神話・伝説の世界とイギリスの影響が比較的少なかった「田舎」と、現代文化の象徴となっていたダブリンの都市像を対比させながら、ベケットの同時代の作家たちはどのようにしてアイルランドの現代を表象したかが分析の対象となる。ダブリンと「セクシャリティ」の観点から、ベケットの1930年代の詩篇を考え直す土台となる。

第三章の「アイルランドの『かたち』：ベケットの書評とアイルランド・ポストコロニアリズム」では主にベケットの1930年代のエッセイと書評が取り上げられている。この分析によってベケットのナショナリズムに対する態度が明らかにされ、「政治無関心」としばしば考えられてきたベケットの社会と国家のあり方への問題意識が論じられる。

第四章は「『名前』の『種類』：ベケット、ジョイス、固有名詞の戦略」と題して、主として1934年の連作短編集『蹴り損の棘もうけ』の冒頭の短編「ダンテとロブスター」が論の中心となる。この分析を通して、後の作品に見られない散文のあり方が指摘され、固有名詞と作品の構造の関係が明らかになる。この論を発展させながら、ベケットの言語への姿勢、特に超越的な存在に言及する際の言葉の使い方が浮き彫りになる。こうしたベケットの言語への関心がやがて後の『名づけえぬもの』に表れてくる。

第五章の「翻訳の不協和論：言語の領土化/領土の言語化」では、ベケットの翻訳の概念と実践が問題となる。ベケットの後年の執筆活動は英語、フランス語両方で行なわれたも

のも多いので、「コスモポリタン作家ベケット」のイメージが強いが、他の近代の 아일랜드作家たちの作品、文芸復興運動の行方などのコンテクストの中でベケットを位置づけると新たな政治的含蓄が見えてくる、と川島氏は指摘する。

審査員全員概ねこの論文を高く評価している。川島氏は丹念に近代アイルランド文学を調べ、基本となる資料を全部当たり、自分の論述に上手に取り入れている。特に日本においてあまり注目されていないアイルランドのナショナリズムとの関連付け、ベケット自身の批評家としての活動の分析は大変刺激的で、おそらくこれから色々と注目されるであろう。

ただし、この高い評価があると同時に、かなり辛いコメントや注文が出されたことも申し付けなければならない。例えば、「同時代の作家たちとの違いを取り上げることはいいが、それらの作家たちの立場や関係性の変化の分析が不足している」、「ベケットの言語実践とアイルランド・ナショナリズムとの関連の内在的分析が足りない」、「ベケットによる批評の分析は評価されるべきだが、その批評とベケットの同時代の他の作品、特に小説との関係についてほとんど触れられていない」、「もっとポストコロニアリズムと関連させた方がいいのではないか」などの指摘があった。

また、脱字や変換ミスも厳しく評された。先に英語で出した自筆論文を部分的に再利用しているせいか、日本語になり切れていない箇所があり、読みにくいところはかなりある。更に、筆者自身による原文和訳のなかでかなり間違っている箇所、勘違いしている箇所もあり、固有名詞の表記ミスも目立ち、多くが指摘された。そのため、出版の前に必ず見直すように、との注文も出された。

しかしながら、これらの欠点は本論文の価値を損なうものではないということが審査員全員の評価である。依って、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。